





バルザック全集

26

東京創元社

バルザック全集 第二十六卷



昭和五十一年三月十日 初版
昭和五十五年十月十五日 三版

訳者

伊藤 幸次
藤 幸次
市保彦

発行所

東京創元社
代表者 秋山孝男

(182) 東京都新宿区新小川町一―一六
電話 東京(〇三)二六八―八三三一
振替 東京 六一―一五六五

印刷・晒 印刷株式会社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集

第二十六卷

目次

書簡集……………三

家族・友人宛の手紙その他……………五

異国の女（ハンスカ夫人）への手紙……………一五

年表……………四二

解説……………四六

人物訳注索引……………四〇

装幀 松田正久

書簡集

家族・友人宛の手紙その他

伊藤幸次 訳

一八一九年

ロール・バルザック宛

一八一九年八月十二日　パリ

ロール嬢へ

僕の引越や暮らしについて、詳しく知りたいだろう。

こんな風さ。

買った物についてはお母さんに直接返事を出しといた。

びっくりするだろうけど、買物どころか、召使をやとったんだよ。

「お兄さんが召使をですって」思っても見なかっただろ。

ナカールさんの召使は、「静寂」という名だけど、僕のは、「僕自身」というんだ。起きると、モワ・メームを呼

んでベッドをつくらせる。

「モワ・メーム」

「何でございましょう」

「昨夜虫に食われたぞ。南京虫がいなか見ても」

「南京虫など全然おりません」

「よろしい」

彼は掃除を始める。でもあんまり上手じゃない。

「そんなに埃をたてるな」

「でも私には埃など見えませんけど」

「こら、理屈を言うな」

すると彼は黙る。こんな召使って素敵だろう。彼は洋服にブラシをかけ、シーツの始末をし、靴をみがき、家具にワックスをかける。彼は歌いながら掃除をし、掃除しながら歌い、しゃべりながら笑い、笑いながらしゃべる。

でも僕は彼をとめて言う。

「モワ・メーム」

「何でございませるか」

「おしゃべりはやめて、食器を出して朝食にしろ」

「畏まりました」

僕は朝食を食べ、その後、何かくすねるといけないので、彼にいつも小言を言ってやる。すると彼は機嫌を損ねるから、直ぐドアの外へ追い出し、鍵をかけて、散歩にやる。

彼は全体的に見て、良い男で、燧炉のわきのタンスに白い紙をきれいに貼ってから、そこへシーツ類を順序よくし

まってくれた。鏡前も自分で取りつけた。六スリーの青い紙と縁飾りをやったら、衝立を造ってくれたし、部屋を書棚から燐焔迄白く塗ってくれた。

まだそんな事はないけど、彼が飽きてきたら、ウィルパリズィに果物でももらいにやるか、アルビに、僕の従兄の御機嫌伺いにやる積りだ。

召使のことは十分話したから、主人のことを話そう。主人とは、僕のことだ。

僕は、雀のかごを出来るだけ綺麗に、金色に塗ってもらった。人生を花々で飾りたい、君に手紙を書く時、僕はそうする為に働いているんだ。

「おや、お兄さんてうまい事言ってる」

「これはね、三階に住んでるお嬢さんに話してあげた事の残りカスだっけと、解らないのかい。でも僕の恋は、彼女が召使を好きになってることが解って、ひどい打撃を受けたんだ。そう、モワ・メームが、彼女に甘い言葉を並べてるんだ」

さて噂話でもしよう。官報はこれでおしまい、これから連載小説という所。

三階の御両親は良い人達で、僕のカンをもつても、未だに何をしているのかは解らない。父親の左半身は全部マヒしてる。

家主は良い人で、奥さんは商売をしていて、押し出しは良いけどちょっと俗っぽい。息子が二人、兄の方はひどい怠け者で、娘はプティ・リオン街の陶器屋に嫁に行っ

る。そこで例のお母さんの、小型の給仕セットのスープ注ぎを買ったのさ。

四階の独り者は、のらくらしてる。僕が一週間のあいだ、ボンヤリ考えたり、物を並べ変えたり、むしゃむしゃ食べたり、ぶらぶら散歩したりして、増しなことは何もしなかったと思うかい。『怪獣』は難し過ぎて、僕の手には余るようだ。それで僕は、勉強したり趣味を養ったりしかしてない。我がおつむ様を両手にお抱え申し上げていなければ、頭をどっちに向けていいか解らなくなりそうだ。

ポーヴァルレ・シャルパンティエ氏を、音楽家としてどう思うか、書いて来て欲しい。ブランシャールが、彼についてニュースをたずねたので、教えてやると約束したんだ。

君にはまさかと思えるような大ニュースがあるから、君だけに教える。僕は未だ砂糖壺を開けてないんだ。

子供っぽい事をいってるけど、でもどう思う。僕は良く考えた手紙を書いている訳じゃない。僕は気の向く儘に書いてるんだから、取り留めのない事を言ってももう驚かないでおくれ。ついでに、手紙はウィルパリズィ宛にする。

紙の半分だけに、悪いペンで書いたり、とりわけ馬鹿なことを言ったりしても驚かないで。出費を見直して、する事全部について儉約しなくちゃならない、書く文字迄ね。それで御覧の通り。

ローランスに手紙を書くひまがないのが残念だ。君と同じ位愛しているのに、そう、正に君と同じ位に。郵便馬車

に間に合うよう急いでるといつてやっておくれ。

さようなら、僕の可愛い妹よ。心からの接吻を送りませ、ローランスにも一緒に。

四フイート八インチ(一五二センチ)のお嬢さん、貴女の賤しい僕しもべ。

オノレ

お母さん宛の手紙で、パパに御挨拶するのを忘れていた、君からそう伝えて、僕の代りに接吻してあげて。

ロール嬢へ

リンネル類で次のものが足りない。白い木綿の長靴下の
一〇番と、グレーの麻の長靴下の三番、それに洗顔用タオル。これが全部の明細です。第一日の、水曜日に、それだけ足りないのを見つけた。コマンおばさんがタオルは探しとくれるはず、靴下二足のうち一足は君の所にあるはず、でももう一足は、何処へ行ったやら。

ロール・バルザック宛

一八一九年九月六日月曜

この手紙は君だけにあてたものだ。

僕の手紙はうまく書けてないと思うだろうが、よく書けた手紙はあらかじめ考えて書いたものだし、心底から思っ

ていることをおしゃべりする訳じゃない。だから君の手紙も僕のもの、心から涌き出したものだと思う。

妹よ

家の人達の辛い事はよく解るし、毎日僕は自分の今の境遇について利己的だなと感じもしている。ダブランドゥ氏が僕について言ったという悪口を書いてくれなかったのを恨むよ。直そうとすることも出来たのに。これからは必ず書いておくれ。

暇があったらアルビから書簡詩を書いてあげただけど。そうしたら韻文好きの従兄達に笑われてただろうな。書き始めは立派だったんだよ(形はできてないけれど)。ヴェルギリウスが、エネアスに、シノンについて、ギリシア人一般に触れて、こう言わせている。「彼によってギリシア人を評せよ」と。僕もこう言いたい。以下の句によって我が詩を評せよと。

吾が妹に捧げる書簡詩

(この中で僕は、いつも言っていた事、もしくは言いたかった事を表現した訳さ)

君は知る 韻踏む折の 我が拙さを。

忘恩なり 我がミュージズ 母妹に

優しき想い 綴らんとする 折も折。

然れば言わぬ 深き愛もて 我が心

思える事を。

つづむれば 生まれ出でたる

アポロンの 甥の子等をば 我が心

君に捧ぐる。

そが愛撫 叔母に向かいて

馨しき 香焚きしめば

思えやよ そはガロンヌより 来れりと

その母は ガスコンの 種なりと。

所で、僕の作品をあれこれ弄り始めてからというもの、もう首迄その中に漬かってしまったみたいだ。時間はいつも足りないし、いろんな想念が湧いて来て、とどのつまり詩才のなさに行き詰ってしまふんだ。

僕は結局の所、『クロムウェル』(チャールズ一世の死)

にテーマを決めた。もう六カ月前近くその構想を練って、何とか目鼻がついた。困った事に、韻文にするのに、少くとも七、八カ月はかかるし、その上推敲しなくちゃならない。

第一幕の主な構想は、もう書きとめてあるし、幾つかの詩句も書き散らしてあるけれど、僕の最初の記念碑を建ててしまいう迄には、七、八回も両手の爪を噛まなきゃならない(こういう創作の中に充満してゐる難しさが、君に解つたらねえ)。あの大ラシーヌでさえ、『フェードル』を推敲するのに二年もかけた事を知るだけで十分だろう。詩人達には絶望的な話だ。二年だよ二年。考えても御覧二年だよ。

こんな風に自分を磨り減らしながら(そのうち夜も昼もなくなる)でも、自分の仕事に、親しい人達を結びつけて考へるのは、奇妙な位楽しいことだ。天が僕に幾許かの才能を与えてくれているなら、それから発する栄光の結実が、君やお母さんにも及ぶのは、素晴らしいことに思える。考へてみるよ、僕がバルザックの名を輝かせたとしたらどんなに幸せだろう。忘却を征服できるのは何という特権だろう。だから、良い着想が浮んで、それを響きの良い詩句にしあげた時、僕には君の声が、「頑張って」と言っているのが聞えるようだ。僕は君のピアノの調べを心に聞き、それから氣持を新たに仕事に向かうんだ。

あの可哀相なおペラ・コミックは見捨てたよ。一体どの作曲家にあれを委せたら良いんだい。どうしようもないよ。それに僕は現代の流行の為にではなくて、ラシーヌやボワローがしたように、後世の為に仕事すべきなんだ。……それに、第二幕はひどく弱いし、第一幕は余りに華やかな音楽を詰め込まれている。考へなくては、考へて考へなくては、という訳で、『クロムウェル』の五幕のことを考へている。一つの悲劇には、通常二千の詩句が必要だ。これは八千から一万回考へ込まなくてはならないことを意味する。着想とか、構成とか、人物とか、状況とか、風俗、歴史、説明、大団円、筋、模倣、調査などに必要な思考を勘定に入れなくてもね。こう計算してみると、すごく丈夫な頭が必要だ。僕は大丈夫だろうか。僕の頭は草臥れて、ひどい歯痛でガンガンしているというのに。僕の事を

嘆いてくれ、うらやんでくれ、僕の事を考えてくれ。でも、余り嘆き過ぎないでくれ。

約束しよう。第一幕の推敲がほぼ終つて、後一息という所迄来たら、それを君に送つてあげよう。でも……：：：シーッ。ふざけるのはやめよう。

僕はとても困っている。その訳はこうなんだ（これは君の縄張りだ）。どんなに苦勞するか解つてもらえろと思ふ。ストラトフォードはイギリスの王妃をウェストミンスター寺院に連れて行くが、彼女は王衣を脱がなければならぬ、イングランドを横断し、ロンドンに着き、宮殿の入口を開かせる為には。——こういつた状態で、彼女は初めどう感じたことだろう。

さんさん苦勞した挙句、僕は誇りを傷つけられた心持が良からうと思つた。僕が正しいかどうか言えるのは、一人の女性しかない。

妹よ、榮光の蔭にはどんなに多くの苦しみが待ち構えていることだろう。萬屋マンヤ萬歳マンサイ。一日中カウンターに向かつて、騒々しいメロドラマだけがお気に入りときてる。何て幸福な連中だろう。でも一生をグリュイエール・チーズと石鹼の間で過す訳だ。それじゃ、萬屋くたばれた。文士万歳。でも文士連中も財布は空っぽ、自惚れは一杯と来ている。やれやれ。みんな一緒にたに万歳、そしてくたばれ。僕がクロムウェルをテーマに選んだのは、近代史のうちでは、悲劇のテーマとして最も相応しいからだ。でも僕の可哀相な『シルラ』のことは残念だ。僕はそれを、『クロ

ムウェル』が成功した場合にしか書き上げられないだろう。

ローランスが病氣になつたのは残念。君の事を考える程、彼女の事を思つてやらなかつたのは氣の毒だった。彼女に、僕は彼女が好きだし、優しくしていれば、世界一魅力的な女性の一人になれると言つてあげて下さい。身持ちの事はさておき、彼女はラヴァイエール夫人のようだし、君は勝ち誇つたモンテスパン夫人という所だ。君は本当に残酷過ぎるよ。だから君の悪口を言つて、ローランちゃんを慰めてあげる。

君達はまた果物を良く食べるねえ。梨やなんかの上で泳いでるんだろ。僕がソーセイジと梨をくわえて寝る頃は、アンリのお腹はグルグル言ってるんじゃないか。これ即ち、果物の不消化って奴。

所で、お祖母さんは豚肉を持つて来てくれた、これは珍味だったよ。

教えてあげると、仕事の息抜きに短い古代小説をちょちょこ書いてる。言葉や考えが浮ぶまま、というより、あちこち飛び飛びにだ。

余り外出はしないけれど、徘徊する時には、ペール・ラシェーズ墓地に行くと言ふ。死人を探し廻りながら、生きてる連中許り見ているよ。

もっと根をつめて仕事するのは、冬迄待つ積り。

芸術

僕には音楽が足りない。君は意地悪く美術館に行けと言うけどどうだい。昨日の日曜日、嘘つきダブランは来なかったぞ。全部の絵についてしゃべらせてやろうと待っていたのに。椅子まで用意して行ったのに。がっかりしちまつた。

死亡通知

トリュミリイ氏の兄さんが死んだと思う。今日ペール・ラシェーズで、用意のできた墓を見た。上に、……マレ氏眠る、中隊あるいは大隊（だったかな）長、一八一九年八月五日没、悲歎の未亡人これを建つ、とあった。君達は好きなように推測し給え。僕の方は、あの人だと思ふ。

外界

フェランの奴と出くわした。ギイ氏とは余り会わないと思うだ。彼が話したら、ギイ氏は君達にそう言うだろうけど、僕はアルビに居ると言い張って、フェランが彼をかuffedと思わせてやりなさい。でも心配ない。そんなこと、言おうともしないだろう。

内界

できたら十月迄とって置こうと思った大ニュースがあるよ。僕はメロンを二つ食べた。僕はちよつとクリウス（ウグス）みたいに暮らしてゐる。胡桃に、梨に、パンと。ちよつとした聖人だな。

セーヌ・エ・マルヌ県

君達が姉妹仲良くしてくれたらうれしんだがな。姉妹愛というのは、見ていてよいものだし、余計君達が好きになるだろう。もしそうできればね。

『クロムウェル』のシチュエーションについて、考えがあったら書き送って下さい。一番有難いのは、第一場で、王と王妃の間の状況だ。その調子は非常にメランコリックで、感動的で、優しく、想念は純粹で新鮮でなければならぬので、絶望している。絵画で言えば、ジロデのアタラの類で、全部が格調高くなければならない。君にオシアンのような琴線があれば、僕に色彩を送っておくれ。

可愛くて優しい妹のロール、とても愛しています。さようなら。

読んでもらいたい素晴らしい計画

君達の都合の良い日に、ウルク運河のどこか君達の都合の良い場所へ、僕が行くのも悪くないと思う。道中誰にも会わないのは確かだ。朝六時に出て、十一時には着ける。お昼を食べて、ガスコーニュの候補生は、二時に歩き始めて九時には、パリに着けるだろう。そして世界で一番大切な人達に会える。でも土曜も水曜も駄目だよ。僕の計画に賛成でも。

さよなら、接吻を送ります、狼男のお兄ちゃんより。

オノレ

教えてやるるか。夕食を食べながら手紙を書いていたの
で、書き終ったら三十口分も食べかけが残った。これか
ら食べてしまふ積り。

ロール・バルザック宛

一八一九年九月　パリ

君だけに

僕は、はつきり『クロムウェル』について方針を決め
た。今やすべて撤退不可能な迄に決定しているのだから、
断固として、これ迄にないやり方で、取り組む積りだ。

五、六カ月うちには、大雑把で一息にだけれど、終り迄行
くはず、一度輪郭を描いてから、好きなように色を塗ら
いと思うから。おそらく九月末か十月初めには第一幕を送
ってあげられる。そのうちから君の好きなように削ったり
切ったりしてくれると良い。あからさまに言うくと、君を
「天才」（可笑しいか）の誕生と、気長な予行演習に立ち会
わせるのは、ありふれた贈物でも、なまかな友情の印で
もないんだ。

これは下書に過ぎないから（所々に完成された部分もあ
るだらうけど）、君が君の卓抜な意見を刻みつけられる余
地を、たっぷり残しておくよ。

可成気持良く夜を過ごせるようになったけれど、寒さで
いばれる（これはお父さんの言葉だ）ので、古い事務用附

掛椅子を一つ買う積りだ。そうすれば少くとも両脇と背中
が寒さから、お尻が痔から守られる。

夜なべで仕事をしてる事については、お母さんには何に
も言わないで。僕にもあれこれ言わないで欲しい。僕は石
にかじりついてでも、『クロムウェル』のお終いまで行き、
お母さんが僕の時間の使い道の報告を聞きにくる前に、何
かを仕上げる積りでいるんだから。

僕は自分の将来について、多くの理由からこれ迄になく
熱中して考えている。それについて少し話そう。我が国の
革命は未だ終了していないし、そのあたりの事柄はまだま
だ波乱を呼びそうだと思う。代議制度は偉大な才能を必要
とするし、選挙民は騙された儘ではない。僕は、文学者
は政治的危機に於いて最も求められる人士である、何故な
ら彼等は科学と知識に洞察力をあわせ持ち、人情を知って
いると思われているからだ、と指摘したい。という訳で、
もし僕が、男の中の男なら（これは未だ解らないことだ
が）、文学的栄光以外にも手に入れられるものがある。偉
大な人物、偉大な市民たることは素晴らしいし、富が僕の
心を引くのは、更に栄光を、善行を施し、周囲にある人達
すべてを幸福にする時に得られる栄光を、手に入れる手段
としてのみなのだ。愛と栄光のみが、そのみが僕の心
（そこには君が相応しい地位を占めている）の持つ広大な
空間を充たすことができるのだ。

優しい妹のロール、僕は君達皆が裕福になってもらいた
いと願っている、僕が自分の天命の故に苦しめられないで

すむように。この件では、幾らか利己的な所があるかも知れないが、それがもたらす善きもののおかげで、許してもらえるだろう。

だから僕は、『クロムウェル』についての僕の計画の成功を、利己心許りからでなく願っている、そして僕はこの悲劇の奴をコーヒーの出し殻のように扱っているんだ。僕はそれから、自分の独立の為に何が引き出せるか計算している。僕は牛乳壺を持ったベレットベレットそっくりで、この比較は真実に過ぎる許りだろう。

もしたまたま、ウィルパブリズィで「才能」という奴を売っていたら、買えるだけ買っておいでとれないか。でも生憎、そいつは売れることも、やることも買うことも出来ないのに、僕はものすごく必要としているんだ。

所で、少し前に君に献じた出来損いの詩句の中に、可成ひどい間違いがある、それは思い出せる限りでは第一行目で、「科学」と言う言葉を三音節にしたが、三音節ある。君のきれいな指の爪をかませてやりたいから、手を入れてみておくれ。直したのを僕に送って下さい。

僕はシャプラン風に韻文の独白を造ってみたんだけど、とても良く出来たと思った。所が見直してみると、殆ど全部間違っていることが解った。何とまあがっかり。

妹よ、僕の事を考えておくれ、それだけを頼みたい。そうして、このラングドック種種のペトルルカに、美しく優しく焦がれる女よ、彼が現代化され、十万里ーヴルの年収があり、社長になれるようしておくれ。さようなら。

H・バルザック

ロール・バルザック宛

一八一九年十一月パリ

『クロムウェル』の構想

おつつしみなさい、お嬢さん、ソフォクレスの弟が話しているのですぞ。君の小さく、綺麗で、可愛いおつむに宿った、小さく、綺麗で、可愛い構想を思い返して、劇作がどんなに手のかかるものか、考えてみて下さい。それには、三一致の法則が要るし、真実らしくないものは全くあってはならない等々の条件がある。人は何年も費やしたものを一時間で読んでしまう。いいかい、お嬢ちゃん、君はストラトフォードが、死ぬ時息子を一人遺したかも知れぬとは思わないのかい。やれやれ。

第一幕第一場は、アンリエットの登場。疲労困憊し、王座の象徴たる王衣を脱ぎ捨てて、彼女はストラトフォードの息子に支えられ、ウエストミンスター寺院の中に行ってくる。彼女は、とても長い旅行（夫に、子供達をオランダに連れて行き、又フランスに救助を願う）に行くよう命ぜられていたのだ）を終えた許りで、イングランドでの最近の出来事を知らない。ストラトフォードは、涙ながらに、新しい出来事の数々を告げ、最後にチャールズは囚われの